

保育者養成における音楽指導の一考察（Ⅱ）
—音楽活動指導の成果をとおして—

丸山京子

A Study of Music Instruction in Preschool Education Training

—Part II—

Kyoko Maruyama

Summary

Last year, the author and others studied music instruction in preschool education training. In that paper, we learn what was required to become successful preschool teacher and the relationship between kindergarten children and preschool education major students. Based on the results of that study, the author has come to realize the importance of music instruction and music performance in childhood development in the preschool curriculum.

Received Oct. 31. 2000

Key words : music instruction, music performance

I はじめに

平成10年の『幼稚園教育要領』では、幼稚園教育の目標のひとつとして「多様な体験を通じて豊かな感性を育て、創造性を豊かにするようにすること」¹⁾が掲げられている。そのなかで幼稚園における音楽教育は「表現」の中に位置付けられ、内容として「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」²⁾こととなっている。保育者養成が教育の柱である本短期大学部でも、これらを念頭に置いた教育がなされている。また、この目標を踏まえて預かり保育など今までの保育形態に加えた新しい保育を教育の対象としなければならない。そこで、前回に引き続いて、幼稚園実習Ⅰ、Ⅱを終えた学生にアンケートをとり、上記課題の基礎資料としてみた。

II 目的

『平成10年版幼稚園教育要領』に沿った本学幼児教育学科における音楽指導も当然の事な

がら、新たな教育・指導が望まれる事になる。そこで、幼稚園実習時に学生が園児に対して音楽活動をどのように展開していったらより実りある実習が行えるのであろうか、また、本学授業において教員がどのように学生を指導していくと、より実践的な幼稚園実習を行えるのであろうか。特に、本論では音楽活動に焦点を当てて考察を試みた。

考察の方法として、以上の問題点を念頭に置きながら1999年5月に行った調査結果³⁾と比較し検討することとした。

III 調査の方法

- ・調査日時：2000年7月の幼児教育学科科目「幼児音楽」を履修した学生120名に対してアンケート調査を行った。有効回答数は108名である。
- ・対象学生：1999年2月に『幼稚園実習Ⅰ』、2000年5月に『幼稚園実習Ⅱ』を終了した学生。

IV 結果・考察

1. 前回調査の結果

ここでは本論に関係する音楽指導に限定して、前回調査結果を簡単にまとめることにする。

ピアノの基礎的実技能力は学生の努力によりある程度身につけていた(『前掲論文』表8参照)⁴⁾。そして、これを実習に役立てるにはいろいろな曲目が演奏できなければならない。そこで、幼児教育学科では実習時に演奏すると思われるピアノ曲をファイルにまとめ、学生がその中から選択し練習するシステムをとった。

学生が実習に備えて自分で選択曲を選ぶ理由としては「聞いたことがある」(56%)、「簡単だから」(33%)という回答が多く、安易に取り組んでいる姿勢が見られた。しかし、指導者側としては学生に対し「ピアノがただ弾けるのではなく、楽しく歌う事もでき、保育の場に応じた展開ができる」⁵⁾事も考えている。

さて、以上のような状況で学生が実習に向かうわけであるが、実習時にどのようにファイル曲が役に立ったのかを今回アンケートで聞いてみた。先にも述べたように以下では、音楽活動を中心としてその内容について検討してみたい。

2. ファイル選択曲の内容と実習成果

今回のアンケートでは実際にどのくらいの学生がファイル曲を利用し、演奏したのか聞いてみた。その結果が表1であるが、最初に指導者側が修得させたい曲(ファイル曲)を選曲した理由について述べてみる。

表1 事前に練習した人数と園側で弾いた人数

指導者が修得させたい曲		事前練習人数 (人)	園側で弾いた人数 (人・%)
①	【1年次2月実習前】（基本的生活の歌）		
	・おはようの歌	70	35 (50.0)
	・おかえりの歌	84	46 (54.8)
	・おべんとうの歌	77	36 (46.8)
	・はをみがきましょう	42	8 (19.1)
	・おかたづけ	55	7 (12.7)
②	【1年2月実習（選択曲）】		
	<生活> ・せんせいとおともだち	43	4 (9.3)
	<行事> ・うれしいひなまつり	37	9 (24.3)
	<季節> ・一年生になったら	22	1 (4.6)
	<季節> ・おもいでアルバム	50	3 (6.0)
	<歌遊び> ・グーチョキパーでなにつくろう	39	8 (20.5)
③	【2年次5月実習（選択曲）】		
	<生活> ・あくしゅでこんにちは	40	8 (20.0)
	<行事> ・とけいのうた	28	6 (21.4)
	<季節> ・かえるのうた	56	12 (21.4)
	<季節> ・ことりのうた	33	4 (12.1)
	<歌遊び> ・トントントンひげじいさん	47	13 (27.7)

(注) () 内の数値は事前練習人数に対し実際に実習園で弾いた学生の比率である。

①欄にある5曲「おはようの歌」「おかえりの歌」などはどの園でも弾くであろう基本的な生活に関する曲として選択し、学生全員に練習させた。②欄の5曲のうち「せんせいとおともだち」は、はじめて園児と実習生とが出会い、友達になろうね、という理由で選曲した。「うれしいひなまつり」は3月の行事が近づいていること「一年生になったら」「おもいでアルバム」の2曲は卒園や入学「グーチョキパーでなにつくろう」はいつでもどのようにでも応用がきくという意味で選曲してみた。③欄にある選択曲のうち「あくしゅでこんにちは」は二回目の実習が始まり園児と再会できてうれしい、ということ園児に知ってもらうために選曲した。「とけいのうた」は6月6日の時の記念日が近づいているという理由で「かえるのうた」「ことりのうた」は季節的な曲としてで選んでみた。また「トントントンひげじいさん」は遊び歌のひとつとして選んでみた。

さて、数値を見ると基本的生活の歌のうち上から3曲「おはようの歌」「おかえりの歌」「おべんとうの歌」は事前に練習した人数が多く、それぞれ70名、84名、77名である。そして、これらの曲はそれぞれ50.0%、54.8%、46.8%の比率で園で実際に弾き歌いされている。「はをみがきましょう」「おかたづけ」は上記の3曲に比べると比率が低くなっているが、基本的な生活習慣の歌と考えられ、今後も練習する必要性はあると思われる。

②欄は最初の実習（2月）前の選択曲である。一番多いのが「おもいでアルバム」で50人が事前に練習している。1年生の2月の実習なので、学生にとっては初めての実習となる。実習はピアノを弾くだけでなく他に多くの仕事があり、ピアノを弾くことに集中できない。そこで、学生自身が弾きやすい曲、または以前から知っている曲を選ぶのは当

然と考えられる。園児と早くお友達になりたいということで「せんせいおともだち」を練習した学生も多い(43名)。ところで、学生が選択した曲は実習時にどれくらいの比率で演奏されたのであろうか。最も比率が高い曲が「うれしいひなまつり」で24.3%である。「おもいでアルバム」は練習した50名の学生の中でわずか3名(6%)の学生が弾いたにすぎない。「一年生になったら」を弾いた学生は1人である。このように最初の実習については学生が選択した曲が必ずしも実習時に弾かれたとは限らないことがわかった。

さて、表1の③欄は2年次5月の実習に向けての選択曲である。学生は2回目の実習となり1回目より多少余裕があり、先生としての自信も1回目の実習よりもついていると考えられる。ここで選択されている曲は学生が自分に弾きやすい曲というよりも、「子どもに聞かせたい」あるいは「子どもといっしょに歌いたい」という意向が強く表れてきていると思われる。同時に前回結果⁶⁾からもわかるように、ピアノを弾く技術も入学時点よりそれぞれ上達してきている。保育者になる意欲、子どもに対する思い入れ、ピアノを弾く力の上達という要素が加わり、表のような比率になっている。すなわち、各選択曲において実際に弾いたという比率が「こたりのうた」を除いて20~30%ほどになっており、最初の実習時に弾いた曲より比率が高くなるという結果になっている。

ここからファイルにまとめた曲がある程度実習園で演奏されていることがわかった。とくに課題曲については比率が5割を超えている曲が多く、園での生活に欠かせない曲として定着していることがわかった。そこで学生はこれらの曲については当然のことながら弾き歌いができなくてはならないと思われる。また、事前に練習した選択曲と実習時に弾いた曲が2月の実習よりも5月の実習時において一致する傾向も現われている。これは学生の実習に対する心構えが、より実践を目指したものになった結果であると思われる。表2はファイル選択曲が実習でどれくらい役立ったのかを聞いたものである。この結果から、学生が事前にピアノの弾き歌いなどを練習することはより実践的な実習に向け必要な曲を知るとともに、実習の雰囲気イメージすることとなる。要するに実習に対し前向きな気持ちや自信にもつながることも考えられる。

表2 ファイル選曲の結果について

	回答数	回 答 例
園で歌う曲のレパートリーを知った	14	・童謡の選択についてファイルが役立った ・ファイル曲は園で聴く機会があった ・基本的な生活の歌が役立った
曲を通じて園の様子をイメージする	3	・授業での練習が実習イメージに役立った ・園の雰囲気が想像できた ・役立つ曲があった
曲を通じて前向きな自信につながる	5	・事前に曲を知り実習の自信になった ・毎日の選択曲練習が自信になった ・実習時に弾かなくても練習が役立った

3. 音楽以外の教材

今回のアンケートは2回目の実習後であり、学生は1回目の実習での経験を基に音楽以外にも教材研究をしている。表3は2回目の実習にあたり用意した教材について聞いた回答を集計したものである。

表3 実習にあたり用意した教材（複数回答） 単位：人

音楽に関する教材		その他の教材	
・手あそび	44	・紙芝居	49
・おかえりの歌	29	・絵本	36
・おはようの歌	27	・パネルシアター	5
・おべんとう	19	・折りがみ	4
・ファイルの曲全部	14	・手品	2
・その他（音楽面）	79	・工作	1
合 計	212	合 計	97

表3によると、音楽に関する教材を用意した学生が延べ212人いる。その内容は手あそびが最も多く44名となっている。「おかえりの歌」等の基本的な生活の歌や選択曲については、ある程度弾ける自身がつき、表1の数値とは異なる結果となっている。

つぎに、音楽以外のその他の教材を用意した学生が延べ97名いる。その内ほぼ半数(50.5%)が「紙芝居」、4割ほど(37.1%)が「絵本」と回答している。幼稚園での教育内容の視点に立てば、最初にも述べたようにこれらは表現に含まれる。ピアノ演奏という音楽活動外の教材を準備しており、学生の進歩した姿がここにもあらわれている。音楽教材以外にも弾き歌いなどを応用すれば、よりゆたかな表現方法となりうると思われる。ここから、学生はピアノ課題曲の意識付けを前提として、さらに手あそび、紙芝居、絵本読みなどの修得を心がけた、より幅広い実習に向けての勉強をしている姿勢が見られる。

4. 子どもとの接点としての音楽と音楽表現

音楽は子どもと保育者との音を通じたひとつの意思伝達手段だと理解できる。よく「音楽は国境を超える」といわれるが、これは「年齢差や考えの壁も超えられる」という事も含むと思われる。表4は「実習中に音楽分野がどのように子供とかかわったか」を聞いたものである。

表4 保育者と子どもの接点としての音楽の役割

	回答数	回答例
子どもの反応	19 (43.2%)	・子どもの創造性を高める ・子どもの元気の源である ・子どもの反応を見られる
	13 (44.8%)	・園生活のパターンは音楽で決まる ・園生活の流れのけじめをつける ・子どもと触れ合う一方
保育者と子どものかかわり	16 (36.2%)	・子どもの気持ちを楽しませる手段 ・子どもをまとめる一番早い方法 ・保育者と子どもの一番近い接点
	9 (31.0%)	・子どもをまとめる ・子どもの身近なところには音楽がある ・子どもをひきつけられる
子どもの行動と行動への導入	9 (20.5%)	・音楽で雰囲気づくりができる ・習慣付け、躰にも役立っている ・言葉かけより音楽の方が導入が早い
	7 (24.1%)	・活動の始め、終わりに役立っている ・身体を動かすときには音楽がある ・子どもは音楽でいろいろ学んでいる

(注) 表の上段の数値は2000年調査(回答数44)、下段は1999年調査(回答数29)の数値である。

これによれば、「子どもの創造性を高める」「子どもの元気の源である」という「子どもの反応」に含まれる回答が1999年、2000年とも多くそれぞれ40%以上を示している(以下、比較は全回答数に占める比率である)。「保育者と子どものかかわり」の項目で音楽は「子どもの気持ちを楽しませる手段」「子どもをまとめる一番早い方法」「保育者と子どもの一番近い接点」(2000年)であるという回答がある。1999年の回答例では「子どもをまとめる」「子どもの身近なところには音楽がある」というものがある。「子どもの行動と行動への導入」に含まれる回答は全体の中で20.5%(2000年)、24.1%(1999年)を占めている。回答例としては「音楽で雰囲気づくりができる」(2000年)「活動の始め、終わりに役立っている」(1999年)がある。音楽は子どもに元気を与え、生活にリズムを与え、子どもの気持ちを楽しませる手段として活用されている。このように考えると、音楽は子どもにとってすばらしくまた一番身近な表現活動であると考えられる。

ところで、このようにすばらしい音楽をより一層実践の場で役立てることはできないものであろうか。表5はただピアノを弾くだけではなく、表現力を加えた音楽活動で保育をする事について聞いたものである。質問は「実習を終えて、音楽面で不足した点(困った点)は何ですか」というものである。ある程度ピアノを弾く技術が上達すれば次にどのように弾くか、またどういう表情で弾けば効果的な保育ができるかを考えるのは当然のこと

保育者養成における音楽指導の一考察（II）

であろう。表5は回答例を基礎的なピアノ演奏技術から表現力豊かなピアノ演奏法までを7つの項目にまとめて集計したものである。

表5 実習時に不足していた音楽活動

	2月実習	5月実習	回 答 例
1. ピアノを弾くだけの指導	14	6	・自分が弾くだけで頭がいっぱい ・片手でしか弾けない
2. レパートリー不足	4	1	・園の歌が弾けなかった ・練習不足を感じる
3. ピアノの弾き歌い	5	2	・歌うことがあまりできなかった ・歌詞を間違える
4. 弾き歌いと同時に子どもを観察	6	9	・子どもを見て弾けない ・子どもの前ではあがる
5. 弾き歌いと表現力ある指導	1	18	・弾き歌いができない ・大きな声で歌えない
6. 暗譜による指導	1	7	・子どもの行動を見て弾けない ・子ども達と楽しく歌う
7. その他	2	3	・オルガンだったので戸惑った ・ピアノを弾く機会がなかった
回 答 数	33	46	

2月の実習では、「ピアノを弾くだけの指導」という回答数が14名で最も多かった。これに次いで「弾き歌いと同時に子どもを観察する事で困った」という回答が6名いた。また、「弾き歌い」（5名）「レパートリー不足」（4名）で困ったという回答もある。5月の実習において困った点は最も多いのが「弾き歌いと表現力ある指導」ができないで、18名いた。これに対して「ピアノを弾くだけの指導」という回答者は6名に減少している。表の項目は最下段のその他の項目を除いて下に行くほどより表現力豊かな指導ができるかを示している。そこで5月実習をみると5と6までの項目が半数以上になっている。要するに、学生は表現力を伴った音楽活動を目指していたことになる。ここにはピアノを弾くことだけにとられず、より表現豊かな演奏法と音楽表現活動を利用して園児とかかわりあいたい、というような学生の成長が見られる。

V おわりに

今回のアンケート結果として第一に、ピアノの基礎技術の向上が考えられる。ピアノがある程度弾けることが音楽活動の基本となっている。今までの指導でもその成果が出てきていると思われるが、今後もより実践的で成果のある指導をしていきたい。

第二に、ピアノの基礎技術能力の向上に基づいた、より実践的な音楽教育が必要である。それには課題として広範囲は幼児歌曲の利用、表現力豊かな幼児歌曲の弾き歌いの指導が求められる。楽譜には従来からテンポ、強弱記号、発想記号が書いてあるが、最近では曲そのもののイメージを奏者が表現できるような用語も用いられている。その曲が持つ雰囲気を感じ、歌うことの大切さも合わせて指導していきたい。また、指導者側が学生に修得させたい曲についても、今後幅広く取り上げていかなければならない。

第三に子どもの音楽感性を豊かにする保育者養成も考えなくてはならない。これには教育を預かる保育者の音楽感性も大切となり、保育者がいろんなジャンルの音楽をより多く聞く事が間接的に子どもの音楽感性を豊かにできるのではないだろうか。

第四に保育者養成校として保育現場との連携も日ごろから十分に密にしていかなければならない。またこれからの時代要請にこたえる保育、例えば乳児保育、延長保育などにおける音楽活動についても重要な課題となるであろう。

最後に、アンケート調査ならびに論文作成にあたり、本学短期大学部幼児教育学科助教授の仲野悦子先生に貴重なご意見やご協力を頂きました。ここに記して御礼いたします。

参考文献

- 1) 大蔵省印刷局編『平成10年版幼稚園教育要領』大蔵省印刷局。
- 2) 『同上書』、12頁。
- 3) 丸山京子・仲野悦子「保育者養成における音楽指導の一考察」『岐阜聖徳大学短期大学紀要』第32集、1999年。
- 4) 『同上紀要』、59頁。
- 5) 『同上紀要』、62頁。
- 6) 『同上紀要』、59頁。